

「福岡市東区香椎地区のまちづくりに関する基礎的研究」プロジェクトの報告

九州産業大学経営学部 聞間 理

九州産業大学にも近く縁も深い福岡市東区の香椎地区は大きな商業地域を抱え、大橋、西新と並ぶ福岡市の副都心としても位置付けられている。平成 23 年度からは、香椎駅周辺土地区画整理事業が進められており、道路区画の整備・拡張や公共施設の再配置が進められるようになっている。JR 香椎駅と並ぶ香椎の交通拠点である西鉄香椎駅の高架下に新たな商業店舗が入るようになる一方で、平成 24 年度からは香椎地区でも数多くの商業テナントが並ぶ「キラキラ通り」を含む区画整理事業が進むことになっている。

こうした動きは、都市計画法に基づき行政が主導する「まちづくり」である。安定した財源に支えられた行政の実行力は日本の「まちづくり」を推進してきた。この観点を重視すれば、都市計画法に基づく、都市計画区域マスタープランや都市計画マスタープランを中心とした諸計画がどのような内容になっており、いかなる理由で策定されたのか、その効果をどう予測し、測定するかという問題が研究の中心となる。都市工学や建築学、マクロデータを活用した経済学、景観研究などの領域は、都市計画策定の理論的な裏付けのために多大な貢献をしてきたし、これからもそうでありつづけるであろう。

一方で、地方分権・地域主権という考え方が強く打ち出されるようになってから、「まちづくり」は行政からの視点だけでは語られなくなっている。その地域の経済を担う資本家や地権者たち、そして企業の活動を通じて「まちづくり」を見るのである。彼らはまちの外観、内実時に行政以上に大きな影響力を発揮している。特に香椎地区のような商業地域では彼らがどのような事業を行うかによって、まちの姿は大きく変わるのである。この観点からは、商圈分析、テナントミックス、消費者の行動分析などの商学・経営学（特にマーケティング）などの領域が重要になってくる。香椎地区の商業データはあまり多くないが、筆者は 2010 年 5,6 月に学生とともに香椎商店街の「キラキラ通り」と「みゆき通り」近辺の交通量調査と来街者アンケートをとっている。区画整理事業の影響がどのように出たのかを検証するために、これらの調査を継続させることは大きな意義を持っている。

さらに今回のプロジェクトを通じて地域住民の方々と知り合い、話をする中で「まちづくり」を理解するために欠かせないと新たに考えるようになった観点がある。すなわち、自治会や町内会を中心とする生活者のネットワークは、各マンションの組合や学校、そして行政組織とも絡み合って形成される複雑な「グラスルーツ」という観点である。この「グラスルーツ」に関する研究はまだまだ少なく、分析の枠組みとしては非営利組織論やネットワーク分析を利用したものが多いが、問題点も少なからずある。その一つは、これらの「グラスルーツ」は人間関係がそうであるように長い時間をかけて形成されており、過去の様々な出来事や経緯を多分に含んだ結びつきであって、シンプルな理念にもとづく関係ではないことである。この点を重視すれば観察者自身がその「グラスルーツ」に入り込み、参加者ともなる文化人類学的なアプローチが有効ではないかと思われる。

そして、これら①都市計画、②商業活動、③グラスルーツという 3 つの観点を総合して考察することも重要な研究課題となる。社会「科学」でありながらも全体的な思考法が求められる。そうして初めて「福岡市東区香椎地区のまちづくり」をより深く豊かに理解でき、さまざまな実践的な提言および活動を提供することができるといえる。